

「校長室の窓から」

令和8年(2026)5月15日(金)

第11号 発行：隈元 優一

— 地域とともに歩む学校をめざして —

拝命してから一か月が過ぎ、地域の皆様にご挨拶する機会をいただきました。本校はこれまでも「ボランティアの西脇北高校」として、地域の中で学び成長する学校づくりを大切にしていまいりました。日頃より本校の教育活動を支えてくださっている地域の皆様に、心より感謝申し上げます。このたびの意見交換を通じて、改めて地域とのつながりの大切さ、そしてこれからの在り方について深く考える機会となりました。

昨年度、本校生徒は年間およそ100件の地域活動に参加しました。草刈りや行事支援をはじめとする一つ一つの活動は決して特別なものではありませんが、地域の中で役割を担い、誰かの役に立つ経験の積み重ねこそが、西脇北高校の大きな強みです。地域での活動は、生徒にとって単なる体験ではなく、人との関わりの中で自らを育てる貴重な学びの場です。これを一時的な関係として「切り離す」のではなく、生徒一人一人が地域に愛着を持ち、卒業後も自然に関わり続けたいような「土台づくり」として大切にしていきたいと考えています。



▲ 清掃のボランティア活動① (R7)

時代の変化により、公園での火気使用の制限など、従来の交流の形が難しくなっている面もあります。しかし、その中でも西脇北高校らしい関わり方は必ずあります。コミュニティセンターの活用や、カレーを囲む交流、小さな文化祭のような協働イベントなど、「顔の見える関係」を大切にしたい新しい形の交流を、地域の皆様とともに模索してまいります。



▲ 清掃のボランティア活動② (R7)

また、「働き方改革」は教職員にとって欠かせない重要な取り組みです。一方で、それが地域との「心の壁」となってしまえば本末転倒です。地域の方々の中には、「切り捨てられた」と感じておられる方もおられると伺いました。本校では、「できる範囲で関わる」のではなく、「地域とともにある学校」として、可能な限り生徒の活動を支えていくという姿勢を大切にしていまいります。それは、生徒の自己肯定感を高めるだけでなく、地域の高齢者の皆様の生きがいや活力にもつながるものと考えています。

今回の対話では、地域の現状の厳しさについても率直なお話を伺いました。高齢化の進行にとどまらず、地域組織の減少やリーダー不足、空き家の増加など、コミュニティそのものの維持が難しくなっている現実があります。こうした状況の中でこそ、「ボランティアの西脇北高校」として果たすべき役割があると考えます。理想論にとどまらず、草刈りなどの実務を通じて支え合う「最小単位のつながり」を大切にしながら、本校としてもその一端を担ってまいります。

本校はこれからも、「ボランティアの西脇北高校」として、地域に支えられ、学び、そして貢献する学校であり続けたいと願っています。生徒の成長と地域の活力が循環する関係づくりに、これからも全力で取り組んでまいります。今後とも、地域の皆様のご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

(裏面へ)

🗓 5月12日 地域を愛し、足元からの「気づき」を

- ふるさと共創事業 第1回クリーンキャンペーンを終えて -

爽やかな風が心地よい季節のもと天候にも恵まれ、本校では「クリーンキャンペーン」午前（1・2部）、夕刻（3部）を実施しました。学校周辺から、童子山公園周辺、成田山周辺、杉原川周辺にかけて、全校生徒が一体となって地域清掃に取り組みました。

今回の活動は、単なる美化活動にとどまらず、日頃見慣れた地域の姿を新たな視点で見つめ直す機会となりました。ゴミを拾うという行動を通して、これまで気づかなかった課題や地域の良さに目を向けることができたのではないかと思います。自分たちが学ぶ環境を自分たちの手で整える経験は、地域への愛着を深めるとともに、生徒一人ひとりに清々しい達成感をもたらしました。

また、生徒会からは「自分たちの手で地域をきれいにしたい」という力強い呼びかけがあり、生徒たちはその思いを共有しながら主体的に活動に取り組んでいました。

活動の中では、地域の方々に進んで挨拶を行う姿や、草むしりなどの環境整備にも積極的に取り組む様子が見られました。安全面においても、交通ルールを守り、生徒同士が声を掛け合いながら行動するなど、協力して取り組む姿勢が印象的でした。

「自分たちの手で、自分たちの街を美しくする」という思いのもと、生徒一人ひとりの行動が杉原川周辺の景観をより美しくし、地域に爽やかな印象を届けることができたと感じています。

今回の活動で得た気づきや経験を、今後の学校生活や地域との関わりの中で、さらに活かしていくことを期待しています。



▲クリーンキャンペーンの様子